チャレンジレポート
その後

講演会、各種開催事業参加 2200 家族、延べ 6000 人の参加規模を誇る NPO へ成長

特定非営利活動法人
「名古屋オレンジの会」
（愛知県名古屋市）

DATA
〒 453-0015 愛知県名古屋市中村区椿町 19-7
チサンマンション椿町 304
TEL&FAX：052-459-5116

本誌 2006 年の『チャレンジレポート』に登場していただいた特定非営利活動法人の「名古屋オレンジの会」を再び訪れてみました。

社会的ひきこもりの若者とその家族に対して各種支援活動を行う NPO で、設立からすでに８年。ますます活動的な鈴木美登里理事の話を聞きながら、フリースペースに集う若者たちの活動ぶりにも触れました。

駅から徒歩５分程度。商店街の一角に ISIS ある。

「その後」というより「いま」を見て欲しいヤングジョブステーションを訪問

新幹線の名古屋駅、太閤口から歩き始めます。特定非営利活動法人『名古屋オレンジの会』の鈴木美登里理事に会うために、地図を頼りに歩き始めたのです。さして迷うこともなく、6分ほどで着いたのが『ヤング・ジョブ・ステーションＩＳＩＳ名古屋』（イシス）と書かれたグリーンの看板のある事務所でした。こちらでは、ひきこもりの方への就労支援としてジョブコーチを行っています。

そっとガラスドアを開けながら「コンニチワ」と声をかけると、中には3人ほどの青年が居て、一斉に振り向きます。鈴木理事との約束を告げると、2階から颯爽と降りてきた赤いジャケットの青年が、「どうぞ、2階へ上がってください。今すぐに連絡を取りますから」と笑顔でいいます。

2階には六畳ほどの部屋と4畳半ほどの部屋。小さい方の部屋にテーブルと椅子があり、そこに座ることを薦められました。さわやかな笑顔で「暑くありませんか」と窓を少し開けてくれます。下から、お茶が運ばれてきました。

しばらくすると、「お待たせしましたぁ」といいながら鈴木さんの登場です。鈴木さんには2006（平成18）年冬号（第36号）『チャレンジレポート』、平成16年度の高齢者・障害者福祉基金の助成を受けての「ジョブコーチによるひきこもりの就労支援事業」に登場していただいています。

今回は「その後」という企画であることを告げました。「その後?」ピンと来ないという感じです。むしろ「いま、名古屋オレンジの会は」という切り口でというと、納得した表情になりました。

「社会に出たいけど出にくい方、人付き合いが苦手な人、こういう人をサポートするのが私たちの会なんです。例えば、不登校とか就職拒否やひきこもりといった形で現代の社会から取り残されたり、孤立しがちな若い人たちとその家族ですね。こうした人たちが健全に育ち、社会の一員として自立するためのいろいろな支援を行っているんです」。少し早口に聞こえますが、ハッキリとした言葉が返ってきます。

学校へ行けない３つの困難、キーワードは「知らない」ということ

不登校と社会不安障害（ＳＡＤ）の関係を話しているとき、鈴木さんの声は自然と大きくなりました。「学校に行けない困難というのがあるんです。１つは本人がＳＡＤを知らない、２つ目は家族が知らない、そして３つ目は学校の環境が知らない」。思わず頷いてしまうほど説得力のある言葉です。

「一度にクリアしようとするからダメなの。マラソンでいう伴走者がいればいいんです」。名古屋オレンジの会では、ひきこもりの経験のある人たちに、その伴走役をしてもらうことにしたのだそうです。その人の気持ちになれる「当事者」がそばについていてくれるわけですから、これほど心強いことはありません。

「まず、みんなに対して声が出せるようになることね。それから誰かのために、何かができると思えるようになることなの。例えば、お茶が出せるようになるとかね。気遣いが出てくるわけですね。自信はここからついてくるんです」。理詰めというより理路整然とした話ぶりに、その先が聞きたくなるような鈴木さんなのです。

「コーチになってからアルバイトに出るとか、それをどれだけ継続できるかですね。基本はボランティアに入ることです」といってひと息入れました。

不登校は減っているという調査の数字が出ていることに対して、「相談を受けている実感では減っていませんね。初めて不登校に関する講演をやったときには80人の会場に１３０人集まりましたし、３回目の講演会では６００名来ましたからね」と実感をこめて話す鈴木さんです。

バイタリティあふれる鈴木さん

会話の途中に何度となく携帯電話の呼び出しがありました。「ごめんなさい」といって電話の会話に移るのですが、帰ってきたときは確実に話が途切れたところに繋がるのです。この人の記憶力、集中力といったものは、一つの才能なのでしょう。

愛知県下でも家族はもちろん、当事者支援というのは珍しい存在

「まず、家族がアプローチしてきますね。愛知県下にこうした不登校に関する団体やＮＰＯは20くらいありますけど、当事者支援というのは私たちだけじゃないですか。草分け的存在だと思います」。自信に溢れた言葉ですが、表情には奢ったところが微塵もありません。実際、愛知県内の社会福祉協議会からは毎年、研修として名古屋オレンジの会の施設に見学にきています。

「名古屋オレンジの会」では、まず「相談」＋「訪問」＋「フリースペース」といった順番で前に進みます。さらに「作業所」「就労体験」「短期アルバイト」「長期アルバイト」といった具合に社会参加への道筋を一人一人の事情に合わせて行っているのです。精神的に不安定な若者、コミュニケーションが困難な対象者に対してのサポートを家族も含めて行っているというのが大きな特徴なのだそうです。

ここで、いただいた資料による就労事業実績をかいつまんで紹介します。現在までの支援の対象者は名簿を有している若者・家族で約８５０家族、問い合わせや講演会参加、各種開催事業への参加を含めると合計２２００家族、講演会参加延べ人数およそ６０００人、グループカウンセリング参加延べ人数およそ1万1６００人などとなっています。

名古屋オレンジの会の組織図を見ますと、理事会や正会員のほかに、家族の交流を目的としたフリースペースの『サロン』と自由な若者のためのフリースペース『ＩＳＩＳ』があります。このほか、名古屋オレンジの会直結の「作業所運営委員会」が設置され、「交流広場ライフアート」「情報センターＮＯＡＨ（ノア）」があります。

「交流広場ライフアート」では、内職作業や各種カルチャー教室を中心に、１日10人から20人の若者が集まり活動しています。午後になるとサッカーやキャッチボールに出かけたり、レクリエーション活動

も盛んなのだそうです。

喫茶店「NOAH」は直営店、いまでは常連客もたくさんやってくる人気店に

ユニークなのは「NOAH」で、喫茶店を営業している小規模作業所なのです。業務には通常5人から10人が参加しています。フリースペースに通うことによって、次第に元気になってきた若者たちから次ぎに求められるのが就労へのステップアップです。

以前は、1日喫茶として月に1度だけ喫茶業務として開いていたそうですが、2004年7月、内装を喫茶店風に改装し、喫茶の開店日も週4日に増やしました。

一般のお客様の中には常連の人も増え始めているとのことです。喫茶ばかりでなく、ランチなどもやっているそうで、リーダーの女の子に話を聞くことが出来ました。「メニューは前の日にみんなで考えます。買い物も手分けして早めに出かけます。ええ、楽しいですよ」と静かな笑顔で語ってくれました。ちなみに、この日のランチメニューは「鯖の味噌煮定食」だそうでした。

作業所でパンを生地作っている光景

先程から鈴木さんの仕事をサポートしている若者がいます。「この人、理事長の息子さんなの」と改めて紹介してくれました。オレンジの会を手伝うために京都から移住してきたのだそうです。「いつまでやれるか分かりませんけどね」と歯切れよく笑顔を見せてくれました。

「あの人は不思議な人なの。彼が訪問に行くとひきこもっていた人が必ずといっていいほど出てくるようになるのね」と鈴木さんがいうのです。いわば「訪問の達人」といったところなのでしょうが、何ともいえない優しさが彼の「オーラ」であることに間違いはないようです。

第36号でも掲載した介護施設での生活支援。この写真はレクリエーションの一環のミニコンサートの場面。

それにしても、このフリースペースは、商店街の1店舗のようなので、不思議に思っていると「元はね、Tシャツ屋さんだったの。しかもオレンジっていう店なの」と嬉しそうに笑う鈴木さん。

奇遇というのでしょうか。オレンジという店の後に『オレンジの会』のフリースペースが入ったというのですから。

ついでに『オレンジの会』の名前の由来も聞いてみました。「理事長が京都、大阪、神戸、姫路をネットワーク交流の広場として作ったときに、未完の大器となるようにと付けた名前なんです。未完は蜜柑でオレンジ、駄ジャレですね、まあ、明るいイメージを意図したんでしょう」と笑いました。

利用者、家族とのつながりはかなり強い

メンバーや家族との長い付き合いを、別のメンバーたちに見せることも大切

2001(平成13)年4月のスタートから今年で8年目。「メンバーも家族も、ボランティアも付き合いが長いですねえ。長い関係を新しいメンバーに見せてあげることも大切なんです」。

鈴木さん自身の楽しみも聞きました。「若者たちの変化を見ることでしょうね。自分自身も変化しますし、社会的価値観も変わってきましたね。親同士が

ISIS での活気のあるミニセミナーの風景

ISIS では交流会も開催される。これもフリースペースならではのもの

支え合うというケースもあるんですよ」と満足そうな笑顔です。

鈴木さんがこの仕事に関わる動機は何だったのか知りたくなりました。「実はね、私自身が不登校だったの。小学校、中学校、高校は1か月通っただけ。大学は大検で。学校が怖かったのね。心の器にヒビが入っているような感じかな。壊れてバラバラにならないようにするのが今の私たちの仕事でしょうか」と言葉を結びました。

鈴木さん自身も当事者だからいえる言葉でもあり、強い説得力を含んでいたわけがよく分かりました。

「じゃあ、行きましょうか」鈴木さんが立ち上がります。「今日はもう喫茶店も終わっちゃってるし、あっちへ行けばみんな居るから」。あっちとは『交流広場ライフアート』のことでした。

ＩＳＩＳの1階に降りると、ちょうど『ミニセミナー』が始まるところ。講師の先生を囲んで8、9人の男子メンバーが大きなテーブルについています。定期的なセミナーなのだそうですが、大学の『ゼミ教室』のような雰囲気で、ざわめきの中に〝学ぶ〟という空気がみなぎっていました。

早足で歩く鈴木さんを小走りで追いかけるように着いていくと、太閤通りに面したマンション。3階と4階が『小規模作業所交流広場ライフアート』だということです。

玄関に直結したリビングダイニングのスペースには5、6人の若者。輪の中でギターを爪弾いている人がいたり、正面の壁際にあるパソコンに向かっている人もいて、こちらはリラックスムードです。

右手奥の広い居間のスペースには大きなテーブルと手前にはソファがあり、数人の若者が談笑しています。

ソファには若い女性の姿も見えます。喫茶店の営業を先ほど終えてこちらに来たのだそうです。旧来の作業所という固いイメージなど全くなく、若者たちの集う姿がすがすがしくさえ感じられる空間がありました。けれど、作業する際には雰囲気が変わります。とてもメリハリのある環境のようです。

レクリエーションやスポーツなどの写真をパソコンから取り出して見せてもらいながら交わした会話では、とても生き生きした「活力」を感じることが出来ました。

鈴木美登里さんが「駅まで送ります」の声で立ち上がると、メンバーたちから「さよなら」の言葉、なんだか嬉しくなってしまいました。

PC 作業も手慣れたもの。高いスキルをお持ちです

高齢者へのパソコン指導は積極的に行っている